

喜多原だより

NO. 76号

令和3年12月吉日発行

スポーツ大会特集

中国地区バレーボール大会

〓 監督 加川綾子〓

今年の喜多原学園バレーボール部は児童4名。そのうち2名が小学生でした。練習の途中で座り込んでしまったり、ボールが怖くて動けなくなったりすることもありました。そのたび練習が止まり、夏休み前は、練習メニューを全員で滞りなく終えることも難しい状況でした。

それでも、ミーティングや日々の練習で、返事や反応をすることの大切さ、自分の表情が周りに影響を与えることを伝え続けました。そのため、キャプテンを中心に、練習中に何度も集合をかけた返事があるまで何度もやり直しをしたこともありました。そして、児童同士で、「笑顔だよ」と声をかけあう状況がでてきました。「みんなのために動く」という意識が高まり、相手を思いながらプレーをする心地よさを感じていってくれたと思います。

試合が近づくにつれ、勝ちにこだわることなく、全員で最後までやり切りたいという気持ちが高まっていました。

今年度の大会は山口県で開催されました。新型コロナウイルス感染予防のため、昨年に引き続き、保護者の応援は制限されま

した。自分たちで声を出し盛り上げていくしかない状況で、試合では、児童同士で顔を見合わせ、「笑顔」「次とるよ」と声を掛け合っていました。連続失点の場面でも、下を向くことなく声を出し続けて持ち返し、最後まで全員でやり切ることが出来ました。

試合後、他県の先生からも応援したくなるチームだと言っていたきました。児童それぞれがバレーを通して大きく成長しました。今後バレー以外のところでも必ずみんなを支えてくれる自信になったはずです。

最後になりましたが、練習から大会出場に至るまで、多くの方に応援していただきました。ありがとうございました。



〓 主将 中卒児童〓

私は七月にバレーのキャプテンをまかされました。正直最初は自信がなかったです。”みんなを引っ張っていけるのか”、とか本当に自信がなかったです。でも、監督や先生達は逆で、”自信がないからこそ自信を付けられるようにキャプテンを選んだ、と言われ、私は監督言葉を受け止めキャプテンをする事にしました。最初は、練習メニューの説明や指示がうまく伝わらず、失敗が何度かありました。でも、折れずに監督に「説明の伝え方を教えて下さい」と相談する事もありました。次の問題は、チーム内の雰囲気でした。声も出ていない、行動が遅い、話を聞いてくれないことがほぼ毎日ありました。練習において、声を出す、行動を早く、とかを目標に入れると、

チームの雰囲気は少しずつ変わりました。

十月十五日、山口県で開催されたバレー大会に児童四人で出場しました。アツプの時はみんな緊張していて笑顔がまったくありませんでした。でもキャプテンである私自身が笑顔でいなきゃ、思いました。試合前は笑顔作りから、次に声を出すを意識すると、みんなの緊張がほぐれました。喜多原学園チームは、小学生二人、中学生一人、高校生一人の四人チームでしたが、三チーム(三県)のリーグ戦で、一県に勝ちました。私たちは結果準備優勝しました。私はキャプテンとして、とてもうれしかったです。

三、四か月前は、声かけも声出しもグダグダだったチームだけど、チームとして成長して声がかく出て、笑顔が絶えなくてとても良かったです。私は、キャプテンをして良かったな、と思います。コート内の言葉かけは、キャプテンの私だけじゃなく、他の三人もみんなに声をかけていた姿勢がとても心に刺さっています。

本当にこのチームで良かったです。

【かけ声のレパートリー】

・喜多原ファイ(オー) ファイ(オー)

ファイ(オー)

・声を出していこう!

・1本カット、コーイ!!!

・ニコニコ(えがお)
・〇〇のサーブが見てみたい、タンタタン イッポーン



試合結果

【1試合目】	喜多原学園	1対2	広島学園
1セット目	23	-	25
2セット目	25	-	17
3セット目	1	-	15
【2試合目】	喜多原学園	2対1	成徳学校
1セット目	24	-	26
2セット目	25	-	15
3セット目	15	-	10

中国地区駅伝・マラソン大会

〜男子駅伝部監督 難波陽介〜

燃えに燃えた野球が終わり、すぐに駅伝部を結団し練習に取り掛かりました。昨年度は自県開催でもあり、会場の準備や整備等であわただしく大会本番まで過ぎましたが、今年度は走ることに専念でき、大会までの計画を立て練習に励みました。

ただ、世の中ではオリンピックは開催されたものの、コロナ感染拡大の勢いは止まらず…。中国地区の駅伝大会の開催は中止となつてしまい、大会開催の代替として、各県でコースを設定し、記録を提出するという大会になりました。ただ、野球大会でも自分たちの目標を大きく持ち、気持ちを切り替えてくれた児童たちは、走ることに最大の敵は自分自身であるとして、「相手に勝つではなく、自分に勝つ」と自己記録の更新を目標に練習を重ねていきました。

本番は、陸上競技場のトラックを借りて、記録会に挑みました。事前にトラックでの練習をしておらず、いつものランニングコースではペース配分が分かるものの、トラックを5周することに苦戦する児童が多い中、トラックは常に仲間への応援の声が聞こえる状況でもあり、それを力にして走ることが出来ました。本番で自己記録を出した児童もいれば、そ

うでなかった児童もいましたが、「自分に勝つ」という目標は達成できたのではないかと思います。

記録を提出してから、数週間後には結果が届き、児童みんな喜びを共有しあえたことは、とてもよかったです。

目の前に相手が居なくても、自分たちのやれることをやり、これまでの自分打ち勝つことが出来る良い体験になりました。



〜男子駅伝部副主将 中一児童〜

僕は、去年七月に入所して、昨年も駅伝大会に参加しました。小学生だったというこのありBチームでの参加でしたが、今年練習をしていくうちにタイムも伸び、副キャプテンを任せられました。これまで、何か役を任せられた経験もなく、

不安やプレッシャーはたくさんありましたが、自分を伸ばしていくいい機会だと思ひ、頑張ろうと思ひました。練習では、キャプテンのサポートや声出しを頑張る、走ることも目標を持ってやりました。

大会が近づいたころ、大会が開催されないという残念な知らせも届きました。でも気持ちを切り替えて、みんなで目標タイムに向かっていい走りを目指して頑張りました。

記録会は、陸上競技場を借りて走りましたが、トラックを走るとみんなの走りが見えて応援などしやすくてとてもよかったです。なにより、みんなが本気で走っている姿を見る事が出来て、うれしかったです。記録を出してから、自分たちのチームが何位だろうかどキドキして結果を待ち、三位だったことや、区間賞がいた事、マラソンでも上位に入賞したことがわかってとてもうれしかったです。

大会結果【駅伝の部】

喜多原学園 総合3位

記録 40分24秒97

区間賞 5区 中三児童

記録 7分46秒40

女子駅伝部監督 小谷智志

今年度の中国地区児童駅伝・マラソン大会は、コロナ禍のため、残念ながら各施設で記録を測定し、結果を提出・集計しての大会実施となりました。正直なところ子ども達も我々職員も、モチベーションが下がりはしました。しかし、実際には、バレーボール大会が終わってから二、三週間、記録測定会に向けて、ほぼ毎日運動日課で二キロランニングをしました。

記録測定会は、名和総合運動公園内の四百メートルトラックを使って、女子児童は二キロメートルのマラソン大会と銘打って二日間実施しました。

子ども達は、二回の記録会に向けて、一生懸命取り組んだことはもちろん、大会当日も、緊張感があるなか、どんなにしんどくても、仲間の応援のもと頑張る姿、最後まで諦めず、一秒でも記録を更新しようとする姿には胸を打たれました。私自身は、名ばかり監督で、子ども達の体力と根性の走りにはいつも脱帽でした。

中国五県の記録発表結果に、喜ぶ者、悔しがる者、反応は様々でしたが、皆が金メダルにふさわしい取り組み姿勢だったように思います。

最後に、今回、一人ひとりが練習から本番まで精一杯やり切った経験は、間違

いなく今後活かされ、学園を巣立つてからも、どんなに苦しい状況でも、踏ん張ってくれることを願っています。

女子駅伝部主将 中二児童

今年は、去年と違って大会という形ではなく、名和の運動場でトラックを走り記録を測定しました。私は、走る事が大好きなので、楽しんで走ることが出来ました。

名和では、二日間記録測定会があったけど、二回とも自己ベストを出す事が出来て、二回目ではなんと、九分四秒というタイムを出す事が出来ました。

私は、走る事は好きだけど、やっぱり速くなれば速くなるほど、しんどくなるので、走るのは結構大変な事なんだな、と感じました。

そして九分四秒という私の最速記録で、中国五県の女子マラソンの部で見事一位になる事が出来ました。

私は、その結果を聞いた時、ものすごくうれしかったです。

その時、私は、やっぱり走るのが大好きで良かったな、と思いました。

最後に、そういう大変だったり、しんどかったりする事についていろいろあるけどすぐにあきらめたりせず、続けるのって大切な、と思います。



大会結果【マラソンの部】

男子

中学生以上 2位 中二児童

小学生 3位 小四児童

女子

中学生以上 1位 中二児童

中学生以上 3位 中卒児童

稲刈り・脱穀体験

児童自立支援専門員 光宗哲平

施設で生活する児童らには、当たり前のように食事やおやつが提供されず、日によって米が、パンが、ポテトチップスが出てきます。児童たちは当然ですが

食事が出てくることに一切の疑問を持つことなく、好き嫌いやこだわりを持つ児童達は残食を出すことも珍しくありません。もちろん、食べられない食事を吐くまで食べなさい、と言うつもりはありませんが、私としては食事が出てくるその背景には苦勞をしている人がいるということを知っておいて欲しいなど、常日頃考えています。

米を作るのは大変なことである。ジャガイモを育て、そこからポテトチップスになるまでは大変なことである。それは考えればわかることで、知識としてはある程度知っていたとしても一次情報として取得していなければ己の身には残りません。

児童自立支援施設では「流汗悟道」という言葉がしばしば使われます。人間は汗を流して、初めて物事の本質を知るといふ考え方です。児童たち自身で実際に種をまき、苗を植え、稲を刈り、それを干し、収穫し、精米をする。そうしてできたお米には、児童たちも「自分が作った！」と特別な感情を抱きますし、欲を言えばこれから食べるお米がどうやってできているかの本質を理解していただけますので、食べ物に対しての浅慮な発言も少なくなるのではと思います。

このような一次情報を得ることはとても大事な経験でありますので、米作り

という一大事な行事に参加させてくださった吉定の方々に深く感謝しております。



後援会の皆様 ありがとうございます

女子寮ではバレーボール大会出場にあたり、遠征用のジャージをそろえさせていただきました。ありがとうございました。

黒地にピンクのラインが入っています。元々ジャージを着ることに抵抗があったのですが、このジャージは色の組み合わせがかわいいので、抵抗なく着ることができます。



編集発行

鳥取県立喜多原学園

鳥取県米子市泉706

TEL 0859-27-1101

FAX 0859-27-1611

編集後記

令和3年最後の喜多原だより No. 76号を作成させていただきました。

今年度から、季節ごと年4回の発行を試み、なるべくタイムリーな情報をお伝えしています。まだまだ、世間はコロナ禍で、色々と学園の活動も自粛を求められていますが、可能な範囲で子ども達とともに、かけがえのない思い出作り・経験をしていきたいと思ひます。

関係者の皆様には、学園職員一同、深く感謝申し上げます。今後とも御支援、御協力いただきますようよろしくお願いいたします。